

## 平成29年度千葉市内主要貝塚資料分析報告

西野 雅人

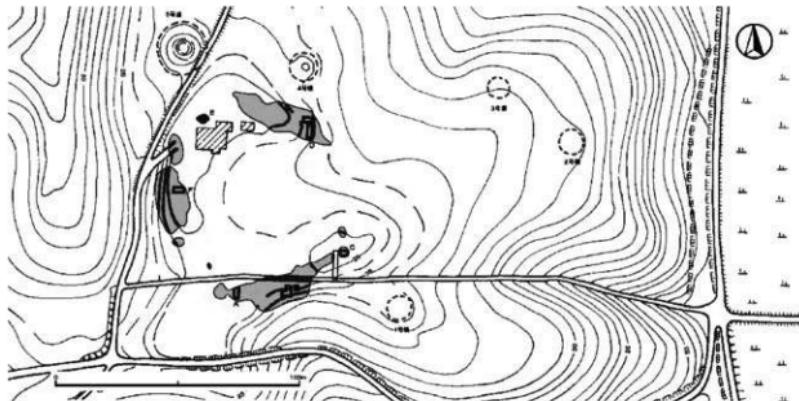
千葉市埋蔵文化財調査センターでは、研究事業の一貫として、市内の発掘調査で採取された未整理の貝サンプルの分析を継続的に実施しており、本誌44号・46号に統いて成果を掲載する。事業の概要と分析方法については44号に記載した。今回取り上げたのは縄文時代中期の3遺跡、古墳時代から平安時代の1遺跡、中世の1遺跡である。

### I 菱名貝塚S42

#### 1 概要

菱名貝塚は千葉市緑区平山町1915-5他(旧字菱名)に所在する。縄文時代の貝塚が集中する都川水系のうち、都川本谷と別れて村田川水系の背後を流れる仁戸名川谷が、二つに枝分かれする付近の標高36mの西岸台地上に立地する。村田川水系・生実谷の谷頭が遺跡の近くにあり、この谷を3kmほど下ると当時の海岸に出ることができたと考えられる。いっぽう仁戸名川を下り、都川河口の海岸までは6kmほどある。立地は都川水系だが、海岸までの距離は村田川水系のほうが近かったことになる。この立地は、都川・村田川貝塚群を構成した集落間の社会的な関係を考える上で、きわめて興味深い。貝層は90m×80mほどの点列鱗状を呈するが、東京湾東岸の中期大型貝塚のなかではかなり規模が小さく、分厚い貝層の堆積も見られない。大型貝塚に含めるか否かも難しいところである。

分析対象は縄文中期・加曾利E I式期の貝サンプルである。分析の結果、貝類を採取した漁場は立地する都川水系ではなく、村田川水系であったことが明らかになった。ただし、村田川水系の他の大型貝塚とは大きく異なる特徴も捉えられるなど、興味深い成果を得ることができた。



第1図 遺跡の地形・調査区と貝層(縮尺1/2000)

発掘調査は、加曾利貝塚博物館が主体となり、昭和42年11月に実施している。千葉市内の主要貝塚の現状を把握し、性格を予察するためのデータを蓄積する目的で行われ、概要が公表されたが(後藤・庄司1969)、報告書は未刊行である。こうした博物館による調査は当遺跡以降行われていない。平成29年度に出土遺物と記録類の確認を行ったところ、未水洗の貝サンプルが保管されていたため分析を実施した。貝サンプルからは貝類以外に土器片61点、微小貝1,054点、炭化物、骨10点を検出した。剥片類は皆無であった。貝層中に動物骨がほとんど混じらず、剥片類が全く混じらない点は、中期大型貝塚形成期の都川・村田川貝塚群のなかでは例がなく、当遺跡の顕著な特徴といえる。

なお、第1図は、調査に先立って行われた平板測量によるものである。貝層の範囲はボーリング調査を実施して、輪郭ができるだけ詳細に把握したとされているが、トレンチ調査の成果とは整合しない。例えば、ボーリングで捉えた面状貝層の中心に設定したBトレンチの貝層は、住居跡の覆土内貝層のみであった。面状貝層の存在はほぼ疑いないが、確実な証拠は得られていない。貝散布は多数存在し、造構内貝層も厚みをもつことから、貝類を比較的活発に利用していたことは確かだが、都川・村田川水系の中期大型貝塚と目されるなかでは、これだけ貝層の規模が小さいのは例外的である。「大型貝塚」の定義は曖昧だが、その範囲に含めてよいかどうか検討が必要である。

## 2 調査と分析の概要

### (1) 貝層とサンプル採取

発掘調査は貝層部分にA～Fの6トレンチを設定して行われている。分析対象とした貝サンプルはB・C・Dトレンチから採取されたものと、ラベルが外れて一括としたものがあり、全体で5か所・28単位、水洗前の体積87.0lである(第1表)。B・C・Dトレンチの貝層はいずれも住居跡内に堆積したものであり、サンプル名は住居跡の番号を採用した。ただし、調査時点では概報の1号は未命名であったため、番号が1つずつ繰り上がっている。今回も概報の番号を採用し、○号住のように略称を用いる。採取した単位(以下「カット」とする)は○番号を付した。なお、ラベルに表記された層番号を現図と照合したが対応させることはできなかった。土器の整理が未了であるが、概報の記載でも、保管された土器をざっと見たところでも加曾利E I式が圧倒的に多いことは間違いない、他の時期の土器はごく少ない。分析対象としたサンプルの時期は加曾利E I式期と推定される。

Bトレンチは1号住(旧未命名)の覆土内貝層であり、層別に12カット採取している。なお、床面でイヌ、貝層下でヒトの埋葬遺体が出土している。Cトレンチの貝層は2号住(旧1号)と3号住(旧2号)の覆土内貝層であり、ブロックや層ごとに採取されている。2号住では2カット、3号住では9カット採取されている。Dトレンチの貝層は4号住(旧3号)の覆土内貝層であり、層ごとに4カット採取されている。一括サンプルは、貝層を調査したFトレンチの6号住(旧5号)・7号住(旧6号)の覆土内貝層から採取された可能性があるが、1号住から4号住の一部である可能性もあり、決め手を欠いている。

### (2) 分析方法

貝サンプルは、袋が避けて採取単位が不明のもの以外について全量を分析・保管対象とした(第1表)。第一合成社のウォーターセパレーション(フュリの目5mm・2.5mm・1mm)を使用した水洗選別とフロテーションを行った。貝類は基本的に5mm(イボキサゴは2.5mmも)から抽出し、巻貝類は殻軸の下端、二枚貝類は殻頂部を同定・集計し、計測可能な個体が多い種は最大200個を計測した。巻貝類は殻径、二枚貝

類は殻長(マガキは殻高)を採用した。微小貝類は抽出のみ行った。脊椎動物遺体については、現地で手掘り採集したもの(現地採集資料)と、水洗選別した貝サンプルから検出したもの(サンプル検出資料)があり同定可能部位の記載を行ったが報告は別途行う。袋が避けたものについては4mmのフリイで遺物を回収した後、貝殻や土は廃棄対象とした。ただし、保存状態の良い貝殻を選んで標本・普及用とした。

### 3 分析結果

#### (1) 貝種組成

14科19分類群の52,051個体を同定した。種名一覧を第2表に、カットごとの同定結果を第3表に、サンプル単位でまとめた組成を第4表に示した。全体ではイボキサゴが85.2%と圧倒的に多く、すべてのサンプルで8割以上を占めている。次いで多いハマグリは全体では8.5%を占める。サンプル間の差は大きいが、いずれも第2位であり、イボキサゴを除いた割合では5割程度となる。イボキサゴとハマグリでは92.7%となり、この2種が貝類利用の中心であったといえる。これ以外のなかで、ウミニナ科とアラ

第1表 貝サンプル一覧

名称	単位	グローブ/区	トレンチ/層	層現地注記	採取量	名称	単位	グローブ/区	トレンチ/層	層現地注記	採取量
1号住	12	日トレンチ			34.5	3号住	9	Cトレンチ			16.0
B-1・2	①	B-1	3層上部		3.0	C-7・8	①	C-7	P2	2P=旧2号住	1.0
B-1・2	②	B-1	3層	中ハマグリ	3.5	C-7・8	②	C-8	5層(貝層)	2P=貝層	5.0
B-1・2	③	B-1	3層		2.0	C-7・8	③	C-7	13層下部	破碎キサゴ	1.0
B-1・2	④	B-1～2	3層	ハマグリ	1.0	C-7・8	④	C-7	純貝層	ハマグリ	1.0
B-1・2	⑤	B-1	3層下部	カワニナ	3.0	C-7・8	⑤	C-7～8	13層下部	マガキ	3.0
B-1・2	⑥	B-1	3層下部	ハマグリ	3.0	C-7・8	⑥	C-7	13層下部	イボキサゴ	1.0
B-1・2	⑦	B-2	3層下部		3.5	C-7・8	⑦	C-7	13層下部	灰層	1.0
B-1・2	⑧	B-1	4層	ピット中キサゴ	4.0	C-7・8	⑧	C-8	22層下部	イボキサゴ	2.0
B-1・2	⑨	B-2	4層	キサゴ層	2.0	C-7・8	⑨	C-8	4層	旧2住内2貝層	1.0
B-1・2	⑩	B-2	5層	ハマグリ純貝	3.5	4号住			Dトレンチ		5.5
B-1・2	⑪	B-1	7層	キサゴ純貝	3.0	D-1・2	①	D-1	純貝層	東側キサゴ層	1.0
B-1・2	⑫	B-2	7層	キサゴ純貝	3.0	D-1・2	②	D-1	混貝土層	ハマグリ・カキ土層	1.5
2号住	2	Cトレンチ			11.0	D-1・2	③	D-2	灰混土貝層	灰泥・キサゴ混貝層	1.0
C-5・6	①	C-6	P1	1P=旧1号住	8.5	D-1・2	④	D-1～2	純貝層	キサゴ純貝層	2.0
C-5・6	②	C-6	3層	ブロック貝層	2.5	一括			不明	ラベルなし	20.0
全体			28単位			全体会					87.0

※採取量は水洗前、単位はg。Cトレは5-6を①②、7-8を①～⑨で作業したが表作成階段で通し番号に付け替えた。

第2表 貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニキノカサガイ科 ニシキワグサイ科 リュウテンサンザエ科	ツボミガイ イボキサゴ スガイ	<i>Patelloidea pygmaea lampanicola</i> <i>Umbonium (Sachium) moniliferum</i> <i>Lunella coronata coreensis</i>
中腹足目	カワニナ科 ウミニナ科 タマガイ科	カワニナ ウミニナ科 ツメタガイ	カワニナ ウミニナ科 ツメタガイ	<i>Semiculuscoparia libertina</i> <i>Potamididae sp.</i> <i>Glossaulax didyma</i>
新腹足目	アツキガイ科 ムシロガイ科 エゾハイ科	アツキガイ ムシロガイ エゾハイ	アカニシ アラムシロ ハイ	<i>Rapana venosa</i> <i>Reticunassa festiva</i> <i>Baileya japonica</i>
二枚貝綱	ウグイスガイ目 イシガイ目 マルスダレガイ目	イタボガキ科 イシガイ科 バカガイ科 マテガイ科 マルスダレガイ科	マガキ イシガイ科 オシフキ バカガイ マテガイ ハマグリ アサリ カガミガイ オキシジミ	<i>Crassostrea gigas</i> <i>Unionidae gen. &amp; sp. indet.</i> <i>Mactra quadrangularis</i> <i>Mactra chinensis</i> <i>Solen strictus</i> <i>Meretrix lusoria</i> <i>Ruditapes philippinarum</i> <i>Phacosoma japonicum</i> <i>Cyclina sinensis</i>
計		14科	19分類群	

第3表 固定結果

種名	全体	1号住												2号住				
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	①	②			
イボキサゴ	44369	16561	826	53	715	414	169	489	422	4968	2811	7	3192	2695	3628	2844	784	
ハマグリ	3864	1683	183	264	60	124	127	119	305	33	80	334	30	24	544	486	58	
カワニナ	1199	1164	108	17	210	25	385	405	11	1	1				15	2	13	
ウミニナ科	905	194	10	4	6	5	7	8	7	12	23	2	64	46	98	88	10	
アラムシロ	674	269	8	2	14	8	20	6	11	40	31	54	75	59	51	8		
シオフキ	429	102	3	66	2	3	13	3	3	1	4	2	2	34	26	8		
マガキ	196	3				1			1		1			2	1	1		
イシガイ科	196	178	67	21	17		30	42	1						7	6	1	
アサリ	126	11		2	1	1	3	1	1		1	1			1	1		
スガイ	24	2					2								1	1		
ツメタガイ	21	7		1		1	2		3						1	1		
イボニシ	15														15	15		
マテガイ	13																	
アカニシ	7	1	1												3	2	1	
オキシジミ	4																	
ツボミガイ	3	1			1										1	1		
カガミガイ	3	2		1											2	1	1	
パイ	2														1	1		
バカガイ	1																	
合計	52051	20178	1006	431	1026	582	759	1073	765	5055	2952	346	3343	2840	4411	3525	886	
採取量	87	35	3	4	2	1	3	3	4	4	4	2	4	3	3	11	9	3
土器	61	10	1	1			1					5	2	3	2	1		
微小貝	1064	882	137	55	36	148	90	96	72	14	209	20	1	4	64	27	37	

種名	3号住									4号住				一括			
	全体	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	全体	①	②	③	④			
イボキサゴ	11106	1204	3634	1266	579	783	1386	554	1598	102	2972	687	49	789	1467	10102	
ハマグリ	583	44	230	19	67	156	19	10	25	13	64	35	5	9	15	990	8
カワニナ	12																
ウミニナ科	294	31	64	26	38	22	39	41	31	2	73	4	1	36	32	246	
アラムシロ	135	14	65	3	11	8	12	6	14	2	58	12		8	38	153	
シオフキ	147	16	28	5	25	17	8	14	3	31	34	11	1	6	16	112	
マガキ	124	3	10	22	1	45	27		10	6	49	41	1	7	18		18
イシガイ科																	
アサリ	53	4	8	7	15	9	2		1	7	7	3	2		2	48	
スガイ	15			4	1	3	3	3	1		4		4			2	
ツメタガイ	4		2			2					2	2				7	
イボニシ																	
マテガイ	11								11		1			1		1	
アカニシ											1			1		2	
オキシジミ	1				1											3	
ツボミガイ	1					1											1
カガミガイ																	
パイ																	
バカガイ																	
合計	12486	1316	4041	1352	738	1045	1497	628	1706	163	3265	754	103	831	1577	11711	
採取量	16	1	5	1	1	3	1	1	2	1	6	1	2	1	2	20	
土器	27	20	4			1		1	1		8	5	2	1	1	13	
微小貝	84	42	33	1	2		1	2		3	6	1	1	3	1	18	

第4表 品種組成

種名	全 体	%	1号住	%	2号住	%	3号住	%	4号住	%	一 極	%
イボキサゴ	44369	85.2%	16561	82.1%	3628	82.2%	11106	88.9%	2972	91.0%	10102	86.3%
その他	7682	14.8%	3617	17.9%	783	17.8%	1380	11.1%	293	9.0%	1609	13.7%
合計	52051	100.0%	20178	100.0%	4411	100.0%	12486	100.0%	3265	100.0%	11711	100.0%

## その他の内訳

ハマグリ	3864	7.4%	1683	8.3%	544	12.3%	583	4.7%	64	2.0%	990	■
カワニナ	1199	2.3%	1164	5.8%	15	0.3%	12	0.1%			8	0.1%
ウミニア科	905	1.7%	194	1.0%	98	2.2%	294	2.4%	73	2.2%	246	2.1%
アラムシロ	674	1.3%	269	1.3%	59	1.3%	135	1.1%	58	1.8%	153	1.3%
シオフキ	429	0.8%	102	0.5%	34	0.8%	147	1.2%	34	1.0%	112	1.0%
マガキ	196	0.4%	3	0.0%	2	0.0%	124	1.0%	49	1.5%	18	0.2%
イシガイ科	196	0.4%	178	0.9%							18	0.2%
アサリ	126	0.2%	11	0.1%	7	0.2%	55	0.4%	7	0.2%	48	0.4%
スガイ	24	0.0%	2	0.0%	1	0.0%	15	0.1%	4	0.1%	2	0.0%
ツメタガイ	21	0.0%	7	0.0%	1	0.0%	4	0.0%	2	0.1%	7	0.1%
イボニシ	15	0.0%			15	0.3%						
マテガイ	13	0.0%					11	0.1%	1	0.0%	1	0.0%
アカニシ	7	0.0%	1	0.0%	3	0.1%			1	0.0%	2	0.0%
オキシジミ	4	0.0%					1	0.0%			3	0.0%
ツボニガイ	3	0.0%	1	0.0%			1	0.0%			1	0.0%
カガミガイ	3	0.0%	2	0.0%	1	0.0%						
バイ	2	0.0%			2	0.0%						
ハバガイ	1	0.0%			1	0.0%						
合計	7682	14.8%	3617	17.9%	783	17.8%	1380	11.1%	293	9.0%	1609	13.7%

ムシロはどのカットでも一定量入っており、これはイボキサゴのかご漁で混獲されたものとみられる。合計でこの2種を上回るのはカワニナである。1号住の①・③・⑤・⑥に集中していた。縦筋が付かないタイプである。シオフキとアサリは大半から、マガキは3号住の多くのカットでみられた。シオフキとアサリではシオフキのほうがずっと多い。イシガイ科は1号住の多くで数十点まとまる例が見られた。これ以外は個体数が少ないが、スガイ・イボニシ・マテガイは特定のカットに少数がまとまっていた。

## (2) 計測値(第5表)

イボキサゴの全体の平均土標準偏差は $12.84\text{ mm} \pm 1.26\text{ mm}$ 、中心は $12\text{ mm} \sim 14\text{ mm}$ である。3号住では $12\text{ mm}$ 以下が多く、③・⑥では平均が $11\text{ mm}$ 程度とかなり小さな個体が混じる。いっぽう、2号住は平均が $14.08\text{ mm}$ であり、 $14\text{ mm}$ を超えるものも多い。こうしたばらつきは、同一漁場で年間にサイズの入れ替えが起きやすいイボキサゴの特徴であり、今回の大小は当地・同時期の平均的なデータに収まる。カットごとの標準偏差が $1\text{ mm}$ 内外に収まり、小さく粒ぞろいな点も同様である。 $10\text{ mm}$ 以下の幼貝が落ちやすい程度の網目をもったかごを使用して採取したと推定される。ハマグリの全体の平均土標準偏差は $30.89\text{ mm} \pm 6.44\text{ mm}$ で、中心は $25\text{ mm} \sim 35\text{ mm}$ である。3号住は平均 $25.07\text{ mm}$ と小さいが、中心的な採取サイズは他と変わらない。平均を下げているのは $20\text{ mm}$ 以下の幼貝が混じるためである。計測を行ったのはイボキサゴがもっとも多い3号住②であるので、幼貝はイボキサゴ漁で混獲されたと推定される。そのほかは全体の平均に近く、サイズは安定している。満1歳～1.5歳の小さなハマグリを安定的に採取していた状況は、千葉市有吉北貝塚とよく似ている。満1歳程度の採取は通常は乱獲と判断されるが、資源量と採取サイズのバランスが取れるように資源管理を行っていたのであろう。

シオフキは平均が $34.94\text{ mm}$ で、中心は $30\text{ mm} \sim 40\text{ mm}$ である。ハマグリよりやや大きめである。アサリは計測可能個体が少なくデータに不安があるが、シオフキよりやや小さい程度である。シオフキやアサリよりも大きく成長するハマグリが小さいのは、採取圧によるものとみられる。サイズの平均が小さい順にハ

第5表 計測値分布

## イボキサゴ

mm	全体	1号住	1号住①	1号住②	1号住③	1号住④	1号住⑤	1号住⑥	1号住⑦	1号住⑧	1号住⑨	1号住⑩	1号住⑪	1号住⑫	2号住	2号住①	2号住②	3号住	3号住①
-6	2																	2	
-9	18																	18	
-10	92	16	1	1														76	1
-11	218	57	3	1														151	3
-12	486	162	19	14	14	13	8	22	62	6	4	3	1	2	253	17			
-13	1188	579	76	90	82	87	26	84	57	25	62	41	18	23	368	73			
-14	1251	593	82	76	91	80	22	73	19	55	95	168	74	94	255	73			
-15	488	221	19	18	12	17	6	13	3	90	43	128	60	68	66	25			
-16	96	31			1			2	1	21	6	42	29	13	11	8			
-17	18	3							3		15	3	3	3					
-18	3																		
試料数	3862	1662	200	200	200	200	62	200	200	200	200	400	200	200	1200	200			
平均	12.84	12.98	12.96	12.98	12.99	12.96	12.93	12.83	11.70	13.99	13.48	14.8	14.32	13.84	12.14	13.11			
標準偏差	1.26	1.03	0.84	0.75	0.68	0.73	0.73	0.86	1.12	0.93	0.80	0.98	1.10	0.77	1.36	0.98			

mm	3号住②	3号住③	3号住④	3号住⑤	3号住⑥	3号住⑦	3号住⑧	4号住①	4号住②	4号住③	4号住④	4号住⑤	4号住⑥	4号住⑦	4号住⑧	4号住⑨	4号住⑩	4号住⑪	4号住⑫
-6		2																	
-9		5	11	2															
-10		32	31	9	3														
-11	1	54	68	23	12	8	5	3	2										
-12	19	70	49	40	58	51	33	18	17										
-13	50	34	39	79	93	140	65	75	60										
-14	94	4	8	43	33	147	61	86	88										
-15	33	1	2	4	1	45	29	17	27										
-16	3					8	7	1	6										
-17																			
試料数	200	200	200	200	200	400	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200
平均	13.23	11.10	10.99	12.18	12.24	12.97	12.97	12.96	13.18										
標準偏差	0.82	1.09	1.31	1.18	0.82	0.95	1.04	0.84	0.91										

mm	全体	1号住	1号住①	1号住②	1号住③	1号住④	1号住⑤	1号住⑥	1号住⑦	1号住⑧	2号住	3号住	一括	mm	全体	1号住①	1号住②	1号住③	1号住④
-10	4														3	1			
-15	35	7	1		3	2	1				2	23	3						
-20	29	3	2				1				2	22	2						
-25	46	11		2	3	1	4	1			13	10	12						
-30	466	259	29	46	31	30	37	68	18	82	65	72							
-35	648	474	58	131	28	37	26	89	105	69	76								
-40	170	121	12	18	7	4	8	8	64	19	8	22							
-45	25	14		2		1			11	4	3	4							
-50	11	5	1	1	1				2	1	1	4							
-55	3									1	1	1							
-60	3									1									
-65	3									1		2							
-70																			
-75																			
-80	1									1			1						
-85	1									1			1						
-90	1									1									
-95																			
-100	1									1									
試料数	1447	894	103	200	73	76	76	166	200	200	163	200							
平均	30.89	31.63	31.52	31.85	29.79	30.01	29.80	30.51	34.39	31.66	25.07	31.27							
標準偏差	6.44	3.91	4.30	2.97	5.14	4.14	4.09	2.38	3.34	9.15	8.60	7.46							

mm	全体	1号住	2号住	3号住	4号住	一括	mm	全体	1号住	マサリ	マガキ	mm	全体	3号住	4号住
-10				1			-10		10						
-15	2			2			-15		15	4	4				
-20							-20		20	1	1				
-25	1			1			-25		25	5	3	2			
-30	18	2		10	1	5	-30	4	30	8	6	2			
-35	115	30	10	43	3	29	-35		35	10	10				
-40	93	30	8	23	3	29	-40	5	40	14	9	5			
-45	27	5	1	11	2	8	-45	2	45	19	15	3			
-50	4			3		1	-50	1	50	17	11	6			
-55							-55		55	8	4	4			
-60							-60		60	6	1	5			
-65							-65		65	2		2			
-70							-70		70	1		1			
試料数	261	67	19	94	9	72	試料数	20	95	65	30				
平均	34.94	35.24	34.84	34.07	36.57	35.61	平均	34.26	40.29	37.48	46.37				
標準偏差	4.61	2.98	2.88	6.19	4.02	3.68	標準偏差	5.09	11.56	10.29	11.98				

マグリ→アサリ→シオフキとなるのは、有吉北貝塚と同じであり、えり好み(=おそらく美味しい順)を示していると考えられる(西野1999)。

マガキは平均が40.29mm±11.56mm、中心は35mm~50mmであるがサイズにこだわらず採取している。本種の特徴的なあり方といえる。イシガイ科は平均32.0mm、中心は30mm~40mmと大き目のものを選んで採取している。カワニナは33.67mm±4.47mmで、1号住の4カット間でほとんど差はない。30mm~40mm中心の大きなものを選んで採取している。

#### (3) マガキの付着痕(第6表a)

3号住⑤で左殻頂部の付着痕を観察したところ、カキ同士(または付着痕なし)9、ウミニナ科5、二枚貝3(ハマグリ2・アサリ1)、不明4であった。カキ同士のものは、付着した個体数が少なくあまり大きく成長していないことからカキ礁の形成には至っていないかったであろう。以上の観察結果から、採取場所はハマグリを採取した場所周辺であり、小規模に集塊したマガキを採取したものと推定される。

#### (4) イボキサゴの利用法

破碎キサゴ(第6表b) イボキサゴを徹底的に叩き潰して粒状にしたものである。しばしば厚い純貝層を形成することから、東京湾東岸の大型貝塚における特徴的なものとして古くから注意されてきた。しかし、近年の詳細な分析・研究の俎上に載ることが少ないので、通常の貝類の選別・集計方法では抜け落ちてしまうからである。破碎キサゴは通常同定・集計の基準とする4mmメッシュからほとんどが抜け落ちる。そのため、近年では2.5mmメッシュまで集計に加えることにしている。通常のサンプルサイズで全量を同定するのは時間がかかりすぎるため、一部のみ詳細に選別する方法を採用している(西野2017)。ただし、完形のものと破碎されたものを区別して提示しないと、破碎キサゴの数量を示すことができない。そこで今回は破碎キサゴがもっと多かった3号住③について、第6表のように遺存形態ごとの数量を提示することにした。なお、2.5mmについては、イボキサゴ以外がどの程度混じっているかを確認したところ、海生微小貝類とウミニナ類の殻頂片が若干確認されたのみで、ほとんどはイボキサゴの破片であった。固結して「破碎キサゴ塊」となったものは皆無であった。

遺存形態ごとの数量とサイズ(第6表c) ほぼ完形のものは759個体で、その計測値は平均11.10mmと小さい。加曾利貝塚の分析では(西野2017)、11mm以下は破碎、13mmを上回るものは通常の利用、12mm~13mmの間が両方にまたがっていた。これによれば、ほぼ完形のものは、破碎キサゴに利用されるサイズが多いが、通常に利用されるも混じるといえる。実際に破碎されたもののサイズがどの程度であったかを

第6表 観察結果

a) マガキ左殻付着痕(3号住⑤)		b) イボキサゴの形態別数量(3号住③)			c) イボキサゴのサイズ比較(3号住③)		
付着痕跡	個数	区分	個数	重量g	サイズ mm	完存	破碎%
カキ同士	9	完形	759	176.0	-8		47
ウミニナ科	5	2.5mm・輪保存	129	9.4	-9	5	31
二枚貝 <sup>※1</sup>	3	2.5mm・輪破損	445	66.8	-10	32	31
不明	4	2.5mm 破片	-	301.0	-11	54	12
合計観察数		1mm破片	-	364.3	-12	70	6
		固結	0	0.0	-13	34	2
		合計	1333	917.5	-14	4	
					-15	1	
					-16		
					-17		
					合計	200	129
					平均	11.1	8.61
					標準偏差	1.09	1.38

※1 ハマグリ2・アサリ1

※2 破碎キサゴは輪軸が残るもの「輪高」から輪径を復元した。

輪径復元値=輪高計測値×1.2794+0.9475

推定するため、殻軸が残る少數について「軸高」を計測して復元殻径を算出した。算出は計算式(殻径復元値=軸高計測値×1.2794+0.9475)によった(西野2017)。

#### (5) 標準貝類相(第7表・写真1)

貝層10当たりの種構成とサイズ構成の内容をデータ化し、実物標本で復元するものである。貝サンプル全体の同定数／採取量(10)で算出し、サイズも計測値に近いものを標本用とサンプル内の貝殻から選んだ。貝種構成は第7表のようにイボキサゴ510、ハマグリ44、カワニナ14、ウミニナ科10、アラムシロ8、シオフキ5、マガキ2、イシガイ科2、アサリ1である。イボキサゴが圧倒的に多く、ハマグリがこれに次ぐ典型的なタイプではあるが、カワニナやイシガイ科が混じるきわめて稀な様相がよくわかる(写真1)。なお、破碎キサゴは写真に加えていない。

#### 4 考察

以上から、内湾砂泥干潟においてイボキサゴとハマグリ漁を行い、付近や河口の内側の泥干潟でマガキやスガイを採取し、集落周辺の淡水域でカワニナやイシガイ科を採取していたとみられる。

都川・村田川水系の中期大型貝塚群のなかで、例外的に貝層の規模が小さい貝塚は、当遺跡のほかに城之腰遺跡、蘇立遺跡を挙げることができる。貝層と遺構の時期は加曾利E I式に限られている。保管されている土器や土器片錐をみたところ、阿玉台・勝坂末から加曾利E II式古段階までであり、やはりほとんどはE I式であった。東京湾東岸の中期大型貝塚のなかで、集落がE I式ないしE II式のはじめころで途切れるのは当遺跡と蘇立遺跡(千葉市教育委員会2021)の2例のみである。城之腰遺跡は阿玉台式後半の集落で、加曾利E I式期を迎えるに廃絶された唯一の例である。規模が小さい点で特異とみられてきた3遺跡が、いずれも途中で集落が途絶える共通点をもっていたのである。

第2図のように、当遺跡は都川・村田川の両水系の貝類資源を利用できる位置にあるが、海岸線までの距離が近いのは生実谷の河口である。イボキサゴと混獲種を除くとハマグリが5割程度であり、シオフキがアサリを上回るのは村田川のパターンであるが、ほかの集落ではほとんど利用しない淡水種を利用していた。こうした特徴は、主要な漁場が、他の集落では利用しない生実谷河口部であったという推定と調和的といえる。

当遺跡の位置づけには、仁戸名川谷の最奥部に位置する長谷部貝塚の内容を知る必要がある。都川水系では加曾利貝塚、村田川水系では長谷部貝塚が、それぞれ唯一中期から後晩期まで継続する集落である。名門ゴルフ場の芝生の下に残る遺跡を新たに調査する機会はないであろう。昭和34年(1959)の発掘調査の出土資料整理がこの遺跡を知る唯一の手掛かりである。菱名貝塚は、規模は小さいとはいえ、集落の全体と地形がそのまま残る貝塚としてきわめて貴重である。

#### 引用文献

- 後藤和民・庄司 克 1969 「千葉市平山町菱名貝塚調査概報」『貝塚博物館紀要』2
- 千葉市教育委員会 2021 『千城台にあった繩文ムラ—蘇立遺跡—』(加曾利貝塚現地説明会配布資料)
- 西野雅人 1999 「縄文中期の大型貝塚と生産活動ー有吉北貝塚の分析結果ー」『研究紀要』19. 千葉県文化財センター
- 西野雅人 2017 「貝類」『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会



写真1 標準貝類相

第7表 標準貝類相

種名	個数	サイズ	別表1	
			mm	イボキサゴ
イボキサゴ	510	別表1	-9.0	2
ハマグリ	44	別表2	-10.0	12
カワニナ	14	別表2	-11.0	29
ウミニナ科	10	未計測	-12.0	64
アラムシロ	8	未計測	-13.0	158
シオフキ	5	別表2	-14.0	166
マガキ	2	別表2	-15.0	64
イシガイ科	2	別表2	-16.0	13
アサリ	1	別表2	-17.0	2
合計	597		合計	510

別表2

mm	カワニナ	ハマグリ	シオフキ	アサリ	マガキ	イシガイ科
-10.0						
-15.0		1				
-20.0		1				
-25.0		2				
-30.0	2	14				
-35.0	6	20	2	1		1
-40.0	5	5	2			1
-45.0	1	1	1		1	
-50.0						
-55.0					1	
合計	14	44	5	1	2	2



第2図 都川・村田川貝塚群(中期中葉)

## II 谷原前遺跡R 1

### 1 概要

谷原前遺跡は、千葉市若葉区高根町940他に所在する。都川本谷を河口から約10km遡った右岸にあり、古鬼怒湾水系・鹿島川の最奥部にもあたる。令和元年、2年の確認調査で加曾利E式前半期(加曾利E式はE I式新段階からE II式古段階)の住居跡・土坑が多数出土し、この時期の集落遺跡であることが判明した。このうち住居跡2軒と土坑2基で貝層を検出しており、遺構確認の範囲内で貝サンプルを採取した。確認調査の成果については、令和元年度分・2年度分とも報告済みである(井出2021・山下2022)。当遺跡に集落が営まれたのは、東京湾沿岸に大型貝塚群が形成された時期にあたり、当遺跡周辺には「印旛沼南岸集落群」と呼ばれる非貝塚集落が点在する(第1図)。これほど海岸から遠く離れた集落に貝殻付きの貝類が持ち運ばれる事例は後期以降に増えるが、中期ではごく稀である。きわめて貴重な事例であり、分析と検討の結果、内陸部に住む人々がごく稀に貝類を自家消費したものという考察を得ることができた。

### (1) 分析方法

サンプルの水洗は第一合成社のウォーターセパレーション(フリイの目5mm・2.5mm・1mm)を使用している。貝類は2.5mm以上から抽出し、巻貝類は殻軸の下端、二枚貝類は殻頂部を同定・集計し、サイズの計測が可能な個体が多い種について最大200個を計測した。なお、微小貝類は分析対象外とした。動物骨や炭化種子は検出しなかった。

### (2) 貝サンプル

令和元年度の確認調査では、27T(27号トレーナーを意味する)の北壁と東壁(北東隅付近)にかかったブロック貝層からサンプルを採取した。北側ブロックでは破碎されたイボキサゴの塊(以下「破碎キサゴ塊」とする)ブロックとそれ以外の部分に分けて2単位、東壁ブロックでは1単位採取した。竪穴の大きさから竪穴住居跡と推定される。30Tでは土坑状の落込み内の貝層を一部採取した。大きさから小竪穴の可能性が高い。貝層の時期は27Tが加曾利E I式、30Tが加曾利E I式末~E II式古段階と推定される。サンプルは2遺構、4か所の合計で7.6kgを採取している。

令和2年度の確認調査では、18Tのほぼ全面にかかる落ち込みを検出し、性格を突き止めるために掘り下げたところ、確認面から0.2mの深さで床面と0.3m×0.2mの小さな貝ブロックを検出した。貝層の全量2.9kgを採取した。18Tでは、推定径1.7m×深さ0.7mの小竪穴内に2つの貝ブロックがあり、Aブロックは0.7m×0.5m×厚さ0.3m、Bブロックは0.3m×0.2mのごく薄い貝層であった。それぞれ全量を採取

第1表 貝サンプル一覧

サンプル名	採取位置	採取単位	カット数	時期	ラベル名	採取量	分析量
R1-27T-1	北壁貝ブロック	一括	1	加曾利E I	27T①西側	2.6	2.6
R1-27T-2	北壁貝ブロック破碎層	一括	1	加曾利E I	27T西・破碎キサゴ	1.4	1.4
R1-27T-3	東壁貝ブロック	一括	1	加曾利E I	27T②東側	2.4	2.4
R1-30T	土坑内	一括	1	加曾利E I~II	30T土坑	1.2	1.2
R2-18T	18T住	一括	1	加曾利E I~II	No.16	2.9	2.9
R2-18T-A	18T土坑Aブロック	ブロック・層別	3	加曾利E I~II	No.18-A①	46.9	28.3
R2-18T-B	18T土坑Bブロック	ブロック一括	1	加曾利E I~II	No.18-B	2.5	2.5
7か所		9カット				59.9kg	41.3kg

※R2-18T-Aは、①17.1のうち8.5kg、②20.6のうち10.0kg、③9.8kgの全量を分析

したが、Aについては①検出面、②破碎キサゴ主体層、③イボキサゴとハマグリの層に区分して採取している。①は採取した17.1gのうち8.5gを、②は20.0gのうち10.0gを、③は9.8gの全量をそれぞれ分析対象とし、残りは遺物等を抽出した後に廃棄した。

### (3) 破碎キサゴ塊とその他の抽出物

なお、②ではサンプルとは別に破碎キサゴ塊が18点取り上げられている。最大長が15cmを超えるものが2点(179×174×54、154×137×67=数値は縦×横×高、単位はmm)。10cm~15cmのもの4点(139×93×61、122×66×59、120×57×42、102×63×57)、5cm~10cmが7点(89×43×37、87×52×35、74×59×37、72×57×42、68×49×37、62×56×39、61×47×35)、5cm以下が4点(49×33×28、48×44×28、47×41×22、44×27×21)であった。また、③にも小規模な破碎キサゴ塊が入っていた(18×13×10、9×8×6)。

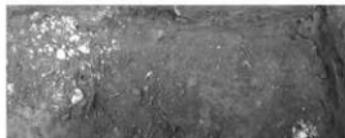
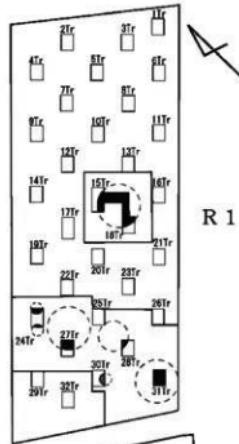
このほかに18T-Aサンプルに陸産貝や貝産微小貝、骨(イノシシ幼獣未萌出歯牙)、炭化種子・炭化クルミ果皮が含まれていたが分析未了である。加工痕のある鹿角も1点出土している。

## 2 分析結果

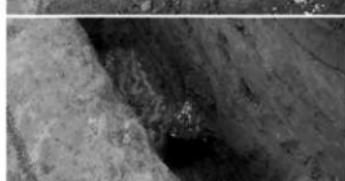
**貝種組成** 同定されたのは11分類群、26,339個体である。このほかにR1-30T・R2-18Tで計17点の破碎キサゴ塊がある。最大のものは18cm×17cm×5cmほどあり、さらに大きなブロックが分解したものであろう。全体の貝種組成はイボキサゴ93.5%、ウミニナ科1.9%、ハマグリ3.2%の3種で98.6%とほとんどを占める。破碎キサゴ塊は個体数の集計に入っていないので、本来はイボキサゴが99%以上を占めていたと考えられる。このほかにシオフキ、マガキ、アラムシロ、スガイが混じる。イボキサゴ・ウミニナ科・アラムシロを除く組成をみると、ハマグリが半分を超えて、シオフキがアサリよりずっと多い。この傾向は村田川水系の特徴に似ている。ただし、村田川水系ではスガイがほとんど混じらない。このようにまとまって出土する例がみられるのは都川水系である。スガイはごく小さく食用に持ち込まれた可能性は低い。混獲の候補となるのはマガキの採取である。27T-3はマガキ25個に対し、スガイ14個と、マガキ自体に付着したものを持ち込んだとしては多すぎる。マガキもごく小さいが巻貝やマガキの幼貝同士で付着し合っているので、こうした塊を採取した際にいつしょに持ち込まれた可能性が考えられる。

第2表 貝種組成

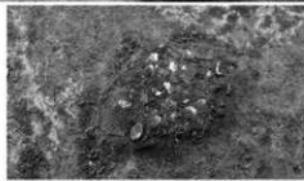
種名	No.	R1-27T-1	R1-27T-2	R1-27T-3	R1-30T	R2-18T佳	R2-18T-A1	R2-18T-A2	R2-18T-A3	R2-18T-B	全体	%
イボキサゴ	694	1283	264	139	31	5827	11150	3633	1638	24639	93.5%	
スガイ			14			1	1			16	0.1%	
ウミニナ科	136	40	177	2	2	34	86	14	1	482	1.9%	
イボニシ			3							3	0.0%	
アラムシロ	5	9	2	1	1	43	91	18	9	179	0.7%	
マガキ	5		25			1	1	5		37	0.1%	
イシガイ科				1	1	1	3			6	0.0%	
シオフキ	13	8	9	2	2	24	19	35	4	116	0.4%	
ハマグリ	91	5	64	1	46	137	34	436	25	839	3.2%	
アサリ	1		1			3	3	3		11	0.0%	
オオノガイ	1									1	0.0%	
合計	945	1325	569	146	83	5071	11388	4144	1677	26339	100.0%	
水洗前体積(0)	2.5	1.4	2.4	1.2	2.9	8.5	10.0	9.8	2.5	41.3	6	
微小貝	10		16		14	38	26	103		181	個	
破碎キサゴ塊					5		17		2	24	個	



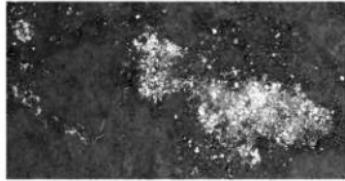
R1 27T



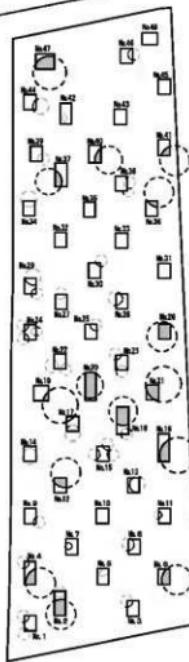
R1 30T



R2 16T



R2 18T



0 1/2,500 20m

第1図 谷原前遺跡確認調査成果

**計測値** イボキサゴについては、塊状でない通常のものと、破碎キサゴ塊のなかに偶然残っている計測可能な個体をR2-18T-A2から抽出して計測し、第3表に別に提示した。通常のものでは殻径の全体の平均土標準偏差は $11.98\text{mm} \pm 1.10\text{mm}$ である。サンプル間の差は小さい。この数値は、都川・村田川水系のもっとも小さいレベルにあたる。現生盤洲干潟のデータ(佐藤2012)によれば、満1歳の殻径は12.2mm、満2歳で18.1mmであるから、採取の中心は満1歳前後で、幼貝も多数含んでいる。破碎キサゴ塊に含まれるのはきわめて小さく、平均土標準偏差は $7.02\text{mm} \pm 0.86\text{mm}$ である。最大でも9.01mmであり、すべて幼貝である。ハマグリ、マガキ、スガイもきわめて小さく、幼貝が主体である。いっぽうウミニナ科は都川・村田川貝塚群のイボキサゴ漁で混獲されたとみられる平均的なサイズである。

**ウミニナ科の食痕** ただし、イボキサゴ漁に伴う混獲に伴うウミニナ科の個体数はイボキサゴの3%程度が普通である。ここでは1割を大きく超えているので混獲は考えにくい。また、ウミニナ科の先端を切断して身を吸い出す方法の証拠となる、a：先端が欠損した体部と、b：切断された殻頂部破片が数多く見られた(写真1)。ウミニナ科の多い27T-1では136個体のうちaは112点(82.4%)、殻頂部破片22点、27T-3では177個体のうちaは113点(63.8%)、殻頂部破片73点であった。サイズは小さいが食用として採取されたことは疑いなく、中期中葉としては、県内初の発見である。

### 3まとめ

谷原前遺跡は、都川本谷と古鬼怒渕水系鹿島川の支谷に挟まれた、両水系の分水嶺にある。この分水嶺は千葉市土気地区から野田市付近を通り、日光・足尾山麓にまで続く陸路であり、狩猟好適地を選んで集

第3表 貝類計測値分布

イボキサゴ 殻径										破碎キサゴ塊 殻径		ハマグリ ウミニナ 殻長 殻高				スガイ 殻径			
mm	全體	R1- 27T-1	R1- 27T-2	R1- 27T-3	R1- 30T	R2- 18T-A1	R2- 18T-A2	R2- 18T-A3	R2- 18T-B	R2- 18T-A2	mm	R1- 27T	R1- 27T-3	R1- 27T-3	R1- 27T-3	R1- 27T-3			
-8						4	3			171	-5.0					2			
-9	5	1	2			2	2	7	4	2	28	-7.5	1			11			
-10	15	5	6	2	2	20	10	6	10	1	-10.0								
-11	69	28	29	2	10	42	10	22	40		-12.5			4		1			
-12	155	66	64	11	14	73	39	88	88		-15.0			10		2			
-13	178	79	70	14	15	48	76	65	49		-17.5			10		3			
-14	51	19	25	7		10	50	14	11		-20.0	3		12		2			
-15	12	2	3	2	5	1	5	1			-22.5	12		25					
-16	3		1	2							-25.0	27		12					
-17											-27.5	36	5			2			
-18											-30.0	20				2			
-19											-32.5	6							
-20											-35.0	4							
-21											-37.5					2			
-22											-40.0								
-23											-42.5					1			
試料数	488	200	200	38	50	200	200	200	200	200	試料数	109	78	14	14				
平均	11.98	11.95	11.99	12.25	11.88	11.33	12.12	11.71	11.54	7.02	平均	25.84	19.50	6.14	23.97				
標準偏差	1.10	0.99	1.10	1.13	1.46	1.21	1.46	0.95	0.94	0.86	標準偏差	3.65	4.07	1.46	9.26				
最小	8.60	8.60	8.60	9.40	8.90	7.27	5.77	8.17	8.76	4.71	最小	7.10	10.60	4.20	13.10				
最大	15.50	14.50	15.50	14.10	15.40	14.02	14.59	14.40	13.71	9.01	最大	34.30	26.30	10.60	41.00				

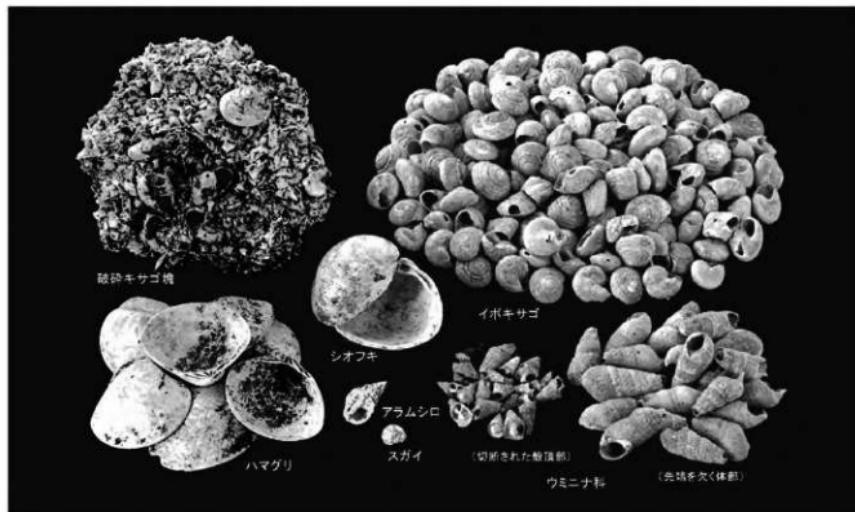


写真1 谷原前遺跡RI貝層の平均的内容

落が営まれた可能性が高い。第2図をみると、この時期の非貝塚集落（●）は印旛沼南岸から鹿島川の樹枝状の谷に点在している（印旛沼南部集落群）。都川水系の貝塚を伴う集落（▲）は、都川本谷の谷奥には存在せず、当遺跡周辺では貝層の検出例が皆無であった。本例は、こうした通常は貝類を利用していない地域に持ち込まれた珍しいケースである。貝類の内容をみると、利用された貝種は東京湾沿岸の大型貝塚群と共通しているが、サイズや組成には明らかな差が認められた。主要種のサイズは、頻繁な利用によって捕獲圧がかかった大型貝塚よりさらに小さかった。ウミニナ科のまとまった出土も例がない。当地域ではほとんど食用とされなかったのだが、わずかな事例は中期後葉で大きな個体を選択するものであった。今回の例は、小さな個体を食用とする類例のないものであった。きわめて小さいマガキも、他の地域では食用とする例が散見されるものの、都川・村田川水系では初めての事例と思われる。

入手ルートは、①村田川水系の海域から菱名貝塚などを通じて間接的に持ち込まれた、②都川を10km近く下って直接持ち込まれたという二通りが考えられる。後期には①の陸路で運ばれたことを示す分析例がある。しかし、本例ではスガイの混獲と、貝類の知識がなかったという見解によって、②の蓋然性が高いといえる。

以上の内容から見えてくるのは、日常的には生きた貝類を利用していない、貝類採取の知識が乏しい人々の姿である。

中期大型貝塚の分布の特徴は、海岸からの直線距離2km～5km程度の範囲に帶状に点在することである。第2図の範囲で海岸からもっとも離れていて、谷頭・分水嶺付近に位置する大型貝塚は加曾利貝塚・滑橋貝塚・藤立貝塚・さら坊貝塚である。イボキサゴとハマグリがほとんどである点は、4つの集落に共通しているが、この2種の生息環境は異なっている。ハマグリ漁は干潟の入口＝河口付近で行われ、イボ



解説：太い点線は房総の三大水系の分水嶺であり、二つの古道「下野一北總回廊」と「南總一北總回廊」でもある。谷原前遺跡はこの時期の主要なシカの移動ルートだったと考えられる「下野一北總回廊」の東側にあって古鬼怒津水系の遺跡群に含まれる。

第2図 谷原前遺跡の位置と関係する遺跡群

キサゴ漁は干潟の先端で行われたと推定される。小型の漁網を使った魚の漁もハマグリと同じ漁場で行つたと考えられる。4つの集落から漁場までは、ハマグリポイントまで4km、イボキサゴポイントまで9kmほどの距離があったと考えられる。この程度の距離が、潮の満ち引きを利用して集落と漁場を行き来できる日が安定して確保できる限界を示している可能性がある。都川は、下総台地のなかに水源をもつ、きわめて緩やかな河川であるが、これほど恵まれた条件下であっても、支谷の水を集めて流れる本谷では、中流域まで帰るのは難しかったらしいことが、今回の分析で見えてきた。

谷原前遺跡の貝層は、中期としては都川中流域で発見された唯一の例外である。この場所まで時折イボキサゴ等を運んだ人々は、中期大型貝塚の人々ではなかったのだろう。位置からすれば、古鬼怒津水系・印旛沼南部低地集落群の構成員だった蓋然性が高い。中期大型貝塚の大きな特徴は様々な点で齊一性が高いことであるが、こうした例外の存在を明らかにできることで、新たな見解を得られたことが今回の成果といえる。

#### 引用文献

- 井出祥子 2021『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書—令和2年度—』千葉市教育委員会  
佐藤武宏 2012『東京湾整備干潟におけるイボキサゴの成長について』『神奈川県立博物館研究報告』41  
山下亮介 2022『谷原前遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書—令和2年度—』千葉市教育委員会

### III すすき山遺跡 S 4 4

#### 1 概要

すすき山遺跡は千葉市源町字すすき山に所在する。都川水系の葭川本谷に面した標高28m舌状台地上に立地する。愛生町周辺に水源をもつ葭川本谷は南流約4kmで谷口に至り、源町北部に水源をもつ支流(殿台支谷)と合流し、さらに東側の支流(廿五里支谷)と合流する。当遺跡は葭川本谷を約3km遡った谷奥部に位置する。付近には縄文後期初頭の大規模集落である餅ヶ崎遺跡がある。

昭和44年に源町の地主が区画整理を計画し、千葉市教育委員会に包蔵地の所在について協議。すすき山遺跡はこの時に行われた遺跡分布調査で発見された。区画整理事業に先立って、昭和44年8月から9月にかけて舌状台地のほぼ全面を発掘した。加曾利貝塚博物館の事業の一環として整理作業と概要の報告を行ったほか(後藤・庄司1972)、集落の時期の検討(横田1982)が行われている。公表された遺構は、縄文時代の住居跡11軒、小窓穴13基、奈良・平安時代の終末期方墳(方形周溝状遺構)10基である。このほかに今日の視点からみれば住居跡、またはその可能性のあるものとして報告対象とすべき遺構が9つある。その検討については今後の整理作業で行うこととした。今回は貝層を検出した遺構に限って、未公表遺構を含めて取り上げた。

縄文時代の住居跡と小窓穴はすべて中期後葉・加曾利E III式からE IV式のものであり(横田1982)、東西220m、南北150mの舌状台地西半の縁辺部に展開する。分布は東側に開口する馬蹄形を呈している。土器以外の出土遺物は、概報によれば石器28点(石鏃8・磨製石斧4・打製石斧4・石皿2・磨石類7・砥石3)、石製品3点(石棒2・玉類1)、土器片錐3点、土器片有孔円板1点である。

#### 2 貝層の検出状況

貝層を検出したのは3~6・8・14・17・18号住で、このうち4号と5号を除く遺構でサンプルが採取されている。18号はこの住居跡と重複する10号小窓穴から検出したものなので、住居内貝層は7か所となる。小窓穴はほかに3号・7号に貝層があり、小窓穴内の貝層は3か所となる。

##### (1) 住居跡

3号 壇穴の中央付近の覆土上部に貝層を形成。炉の付近ではやや厚く0.3mほどある。17.0ℓの貝サンプルが採取されている。遺構の時期は加曾利E III~E IV式と推定される。

4号 壇穴中央の炉の直上に径0.5m、厚さ0.2mほどの小さな混土貝層を形成していた。サンプルは採取していない。

5号 壇穴中央の覆土中に径1.1m、厚さ0.2mの混土貝層を形成していた。サンプルは採取していない。

6号 加曾利E III式期の壇穴の中央よりやや南の覆土中に1.4m×0.9m、厚さ0.2mの貝層を形成する。炉の付近では床面に近い。20.0ℓのサンプルが採取されている。

8号 加曾利E IV式期の壇穴覆土中の3か所に小規模な貝層を形成していた。最大のもので1.2m×0.7m、厚さ0.1mほどである。貝サンプルは2単位で合計37.8ℓ採取されているが、採取位置は不明である。一方にはLpitと注記されていたが、対応する柱穴等を特定できなかった。

14号 加曾利E III式期の壇穴東壁に近い部分の覆土中に0.4m×0.3m、厚さ0.2mほどの小規模な貝層1か所を形成していた。7.6ℓのサンプルが採取されている。

17号 加曾利E IV式の住居跡である。



第1図 すすき山遺跡概略図(縮尺1/2000)



写真1 調査中のすすき山遺跡

## (2) 小堅穴

3号 17号住のP3として調査されている。出土した土器は少ないが称名寺式がまとまっている。17号住は加曾利E IV式期なので、覆土を切って掘り込まれたものであろう。17号住として採取された18.5ℓの貝サンプルがある。貝層を検出したものとみられる。

7号 概報によれば破碎キサゴ塊が入っていたとされているが、遺構の記録や出土遺物は見当たらず不明である。貝サンプルも見つかっていない。

10号 径1.5m、深さ0.8mの円筒形の小堅穴であり、18号住の覆土を切ってイボキサゴ層と破碎キサゴ塊が入っていた。出土土器から小堅穴の時期は加曾利E IV式と判断した。18号住はE III式とE IV式の土器が混在していた。貝サンプルは「18住」の名前で3単位採取されている。サンプルA(24.7ℓ)、B(23.5ℓ)は通常のイボキサゴ層、Cは破碎キサゴ塊を取り上げたものである。固結状態のものは、①13×15×7cm(0.7kg)、②13×17×8cm(0.9kg)、③14×21×90cm(1.4kg)、④18×25×11cm(2.6kg)の4点で合計5.6kgを保管対象とした。また、分析のために一部を崩したものを9.3kg保管対象とし、そのうち5ℓ、4.5kg分を4mm・2mm・1mmの試験フライで選別し、4mm・2mmメッシュに残ったものについて個体数を出した。

## 3 貝サンプルの分析結果

## (1) サンプルと分析方法

5軒の住居跡でサンプルが採取され、45箱が保管されていた。このうち21箱・約150ℓを詳細サンプルとして分析・保管対象とした(第1表)。サンプルは5mm・2.5mm・1mmメッシュのフライを使った水洗とフロテーションを行い、乾燥後に選別を行った。貝類は貝種組成と計測値を示し、平均的な種・サイズ組成を示す「標準貝類相」を算出した。なお、18号住の破碎キサゴサンプルは、破碎されたイボキサゴが塊状を呈するもので、大きめの塊4点・5.6kgと、貝類の内容を検討するために塊を崩したもの9.3kgの合計14.9kgを保管対象とした。塊を崩したものについては、4mm・2mm・1mmの試験フライを使って選別したもの約5ℓ・4.6kgを分析対象とした。

残りの24箱は簡易サンプルとし、4mmメッシュの園芸フライで遺物や標本用の保存の良い貝殻を抽出し残りは廃棄した。サンプルには多くの土器片が混じっており、有文の土器は加曾利E III式であった。貝刃とヘラ状貝製品の破片各1点が見つかったほか、炭化材と微小貝を少量検出した。動物骨は皆無であった。

第1表 貝サンプル一覧

通号	サンプル名	紀要No.	遺構	時期1	時期2	採取位置	体積	備考
1	03住	No.1住	住居跡	縄文中期	E III~IV	III層	17.0	
2	06住	No.5住	住居跡	縄文中期	E III		20.0	
3	08住-A	No.6住	住居跡	縄文中期	E IV		18.7	
4	08住-B	No.6住	住居跡	縄文中期	E IV	Lpit	19.1	
5	14住	No.9住	住居跡	縄文中期	E III		7.6	
6	03土坑	-	小堅穴	縄文中期	称名寺		18.5	ラベルは17住
7	10土坑-A	-	小堅穴	縄文中期	E IV	Lpitイボキサゴ層	24.7	ラベルは18住
8	10土坑-B	-	小堅穴	縄文中期	E IV	イボキサゴ層	23.5	ラベルは18住
9	10土坑-C	-	小堅穴	縄文中期	E IV	破碎キサゴ	5.0	別工場で分析
						合計	154.1ℓ	

## (2) 貝種組成

同定された分類群は12科18種、同定数は128,044個体である。第3表に同定結果を示した。6遺構、8サンプルの構成はほとんど同じであるため、全体の合計を個体数が多い順に並べたものを第4表に貝種組成として示す。イボキサゴを主体として、アサリ・ハマグリ・シオフキ・マガキと、イボキサゴ漁で混獲されたウミニナ科・アラムシロが混じるあり方は、都川・村田川貝塚群中・後期貝塚に共通する特徴である。

第2表 貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科 リュウテンサザエ科	イボキサゴ スガイ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> <i>Lunella coronata coreensis</i>
中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ科	ウミニナ科	<i>Potamididae sp.</i>
新腹足目	タマガイ科 アクキガイ科	タマガイ科 アクキガイ科	ツメタガイ アカニシ	<i>Glossaulax didyma</i> <i>Rapana venosa</i>
	ムシロガイ科		イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>
	クダマキガイ科		アラムシロ ムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i> <i>Niotha livescens</i>
			モミジボラ	<i>Inquisitor jeffreystii</i>
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ サルボオ	<i>Tegillarca granosa</i> <i>Scapharca subcrenata</i>
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	マルスダレガイ目	バカガイ科 マルスダレガイ科	シオフキ ハマグリ アサリ	<i>Mactra quadrangularis</i> <i>Meretrix lusoria</i> <i>Ruditapes philippinarum</i>
	オオノガイ目	オオノガイ科	オキアサリ カガミガイ オキシジミ オオノガイ	<i>Gomphina (Nacridicus) aequilatera</i> <i>Phacosoma japonicum</i> <i>Cyclina sinensis</i> <i>Mya arenaria oonogai</i>
	計	12科	18種	

第3表 貝類同定結果

種名	No.	03住	06住	08住-A	08住-B	14住	17住	18住-A	18住-B	全休	%
イボキサゴ	6700	8812	18065	25657	1624	12162	20702	28335	122057	95.3%	
スガイ	2			2					4	0.0%	
ウミニナ科	37	24	41	83	3	14	138	172	512	0.4%	
ツメタガイ		1			11		2		14	0.0%	
アカニシ		1							1	0.0%	
イボニシ	5			1	2				8	0.0%	
アラムシロ	121	114	43	122	2	62	196	272	932	0.7%	
ムシロガイ				1					1	0.0%	
モミジボラ				1					1	0.0%	
ハイガイ	4				1		1		6	0.0%	
サルボオ	3		1	1	1				6	0.0%	
マガキ	67	7	5	24	22	2	1	1	129	0.1%	
シオフキ	203	17	6	11	16	49	7	16	326	0.3%	
ハマグリ	95	204	103	304	189	454	64	89	1502	1.2%	
アサリ	242	1694	43	64	236	71	31	41	2422	1.9%	
オキアサリ	14	7	1	5					27	0.0%	
カガミガイ	8								8	0.0%	
オキシジミ	69				2	5	5	5	86	0.1%	
オオノガイ	1					1	1	1	3	0.0%	
合計	7571	10881	18308	26276	2109	12819	21148	28932	128044	100.0%	
水洗前体積	17.0	20.0	18.7	19.1	7.6	18.5	24.7	23.5	149.1	0	

イボキサゴ以外で見たとき、ハマグリが半分以下で、アサリとシオフキを比べるとアサリのほうが多い点は都川流域の特徴に合致する。

当遺跡の特徴は、イボキサゴが圧倒的に多く全体の95.3%を占めており、ハマグリがとても少ないとである。このほかに破碎されたイボキサゴの塊(以下「破碎キサゴ塊」とする)も多量に出土していることから、貝類採取活動の大半はイボキサゴ漁であったといえる。二枚貝漁はごく少なかったか、または採取効率が悪く結果的に少なかったのであろう。

希少種もほぼ付近の海域で当時採取できたものである。ハイガイは少なくとも中期後葉までは採取されており、オキアサリも数は少ないが葭川流域の貝塚で普通に混じる。スガイは主要な生息地は岩礁域だが、カキ礁に付くほか、加曾利貝塚でもまとめて採取された例がある。モミジボラ(写真2)は沖域の砂底に棲むもので、打上げまたは化石層由来の死貝を持ち込んだものであろう。

第4表 貝種組成

種名	全 体	%
イボキサゴ	122057	95.3%
その他	5967	4.7%
合計	128044	100.0%
その他内訳		
アサリ	2422	40.5%
ハマグリ	1502	25.1%
アラムシロ	932	15.6%
ウミニナ科	512	8.6%
シオフキ	325	5.4%
マガキ	129	2.2%
オキシジミ	86	1.4%
オキアサリ	27	0.5%
ツメタガイ	14	0.2%
イボニシ	8	0.1%
カガミガイ	8	0.1%
ハイガイ	6	0.1%
サルボオ	6	0.1%
スガイ	4	0.1%
オオノガイ	3	0.1%
アカニシ	1	0.0%
ムシロガイ	1	0.0%
モミジボラ	1	0.0%
合計	5967	100.0%

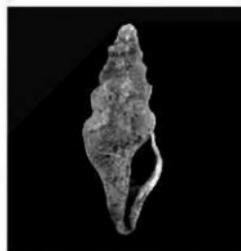


写真2 モミジボラ

第5表 計測値分布

イボキサゴ絶長		オキシジミ絶高		オキアサリ絶高	
mm	全体	mm	全体	mm	全体
-9.0	1	-15.0		-15.0	
-10.0		-20.0		-20.0	3
-11.0	4	-25.0		-25.0	6
-12.0	85	-30.0	2	-30.0	2
-13.0	452	-35.0	11	-35.0	4
-14.0	539	-40.0	17	-40.0	4
-15.0	247	-45.0	18	-45.0	2
-16.0	152	-50.0	4	-50.0	
-17.0	93	-55.0		-55.0	
-18.0	24				
-19.0	3				
試料数	1600	試料数	52	試料数	21
平均	13.70	平均	38.29	平均	28.89
標準偏差	1.32	標準偏差	4.81	標準偏差	8.07
ハマグリ絶長		シオフキ絶長		アサリ絶長	
mm	全体	mm	全体	mm	全体
-15.0	10	-10.0		-10.0	
-20.0	8	-15.0		-15.0	7
-25.0	30	-20.0		-20.0	4
-30.0	165	-25.0		-25.0	27
-35.0	315	-30.0		-30.0	136
-40.0	199	-35.0	10	-35.0	166
-45.0	36	-40.0	32	-40.0	41
-50.0	19	-45.0	45	-45.0	18
-55.0	1	-50.0	16	-50.0	4
-60.0	2	-55.0	3	-55.0	1
-65.0	1	-60.0		-60.0	
-70.0	2				
-75.0					
-80.0	1				
-85.0					
-90.0					
-95.0	1				
試料数	790	試料数	106	試料数	394
平均	33.08	平均	40.88	平均	30.69
標準偏差	6.48	標準偏差	4.36	標準偏差	5.52

### (3) 計測値(第5表)

計測可能な個体が多い6種について計測を行い、ヒストグラムを提示した。元の計測データは当センターで保管している。いずれも当地域の加曾利E式後半の平均的なサイズであるが、シオフキはやや大きく、アサリはやや小さめである。

### (4) 破碎キサゴ塊(第6表)

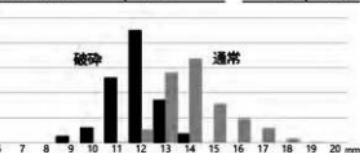
イボキサゴの活発な利用の意味については未解明の部分が多いが、少なくとも二つの利用方法があることがわかっている。しばしば分厚い堆積層を形成する破碎キサゴ層のイボキサゴは通常のイボキサゴ層のそれに比べて明らかに小さい。このことは金子浩昌氏によって古くから指摘されていたが(金子1988)、加曾利貝塚のサンプルで計測を実施して追認できたので(西野2017)、当遺跡でも確認することにした。ただし、2遺跡の資料は状態がやや異なっていた。加曾利貝塚の資料では破碎が徹底していたため殻径を計測できる個体が多く、「軸高」という部分計測から殻径を推定復元した。いっぽう、当遺跡の資料は破碎を免れたものが一定量入っていたため、計測可能な200個の殻径を測り、計測値分布を通常のイボキサゴと比較した(第2図)。参考と示した加曾利貝塚に比べるとやや大きめであるが、通常のイボキサゴに比べると明らかに小さいことがわかる。

### (5) 標準貝類相

貝層10当たりの平均的な内容を数値と標本で表現するものである。貝サンプル全体の同定数/採取量(%)で算出し、サイズも計測値に近いものを廃棄予定の貝殻から選んだ。貝種構成はイボキサゴ819、アサリ16、ハマグリ10、アラムシロ6、ウミニナ科3、シオフキ2、マガキ1、オキシジミ1である。イボキサゴが圧倒的に多い典型的な事例となる(写真3)。

第6表・第2図 破碎キサゴ塊のイボキサゴ計測値分布

mm	破碎	%	通常	参考 加曾利貝塚	
				破碎	通常
-6				1	
-7				3	
-8				26	
-9	5	2.5%	1	0.1%	78
-10	12	6.0%			4
-11	52	26.0%	4	0.3%	120
-12	90	45.0%	85	5.3%	14
-13	34	17.0%	452	28.3%	107
-14	7	3.5%	539	33.7%	63
-15			247	15.4%	579
-16			152	9.5%	1185
-17			93	5.8%	1
-18			24	1.5%	631
-19			3	0.2%	324
-20					113
					34
					3
試料数	200		1600		443
平均	11.30		13.70		10.08
標準偏差	0.98		1.32		1.57
50%				5555	

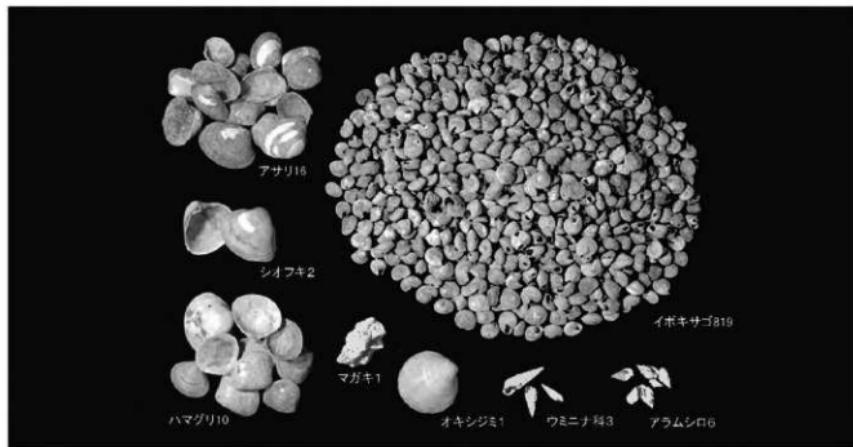


第7表 標準貝類相

種名	個数	サイズ	別表1	
			mm	イボキサゴ
イボキサゴ	819	別表1	-9.0	1
アサリ	16	別表2	-10.0	
ハマグリ	10	別表2	-11.0	2
アラムシロ	6	未計測	-12.0	44
ウミニナ科	3	未計測	-13.0	231
シオフキ	2	別表2	-14.0	276
マガキ	1	未計測	-15.0	126
オキシジミ	1	別表2	-16.0	78
合計	859		-17.0	48
			-18.0	12
			-19.0	1
合計	819			

別表2

mm	アサリ	ハマグリ	シオフキ	オキシジミ
-25.0	1			
-30.0	6	2		
-35.0	6	4		
-40.0	2	3	1	
-45.0	1	1	1	1
-50.0				
合計	16	10	2	1



標準貝類相は、貝層18あたり(または貝類200個)の平均的な数、大きさを復原して、貝種組成と計測値分布を実物で表現したものである。すすき山遺跡では、小さないボキサゴが大半を占めること、アサリ、ハマグリが多く混じり、アラムシロ、ウミニナ科、シオフキ、マガキ、オキシジミが少し混じることがわかる。

写真3 標準貝類相

#### 4まとめ

当遺跡は、中期大型貝塚がすべてなくなり、その場所を避けて周辺にできた加曾利E III式期を中心とした中規模集落である。その例に入る牛尾浜・小中台・すすき山・加曾利・うならすずの各集落は、数十軒の住居跡をもち、遺構内貝層が多いが、面状貝層を形成しない点で共通する。貝類の利用は縮小したが、イボキサゴ漁に偏る傾向はむしろ強まることも追認された。破碎キサゴ層を形成する幼貝漁も引き続き行われたが、当遺跡の場合は叩き潰しがやや不完全であった。大型貝塚の消滅後に生産・居住様式がどう変化したのかを知る上で、今回のデータは貴重なものとなるであろう。

近傍の餅ヶ崎遺跡はこの段階では貝層をもたない小規模集落であり、E IV式期に県内最大規模の集落となった。すすき山から餅ヶ崎へと集落の場所を移した可能性がある。この時期の遺跡間比較については餅ヶ崎遺跡の報告書で行っている(西野2019)が、当遺跡の比較分析については今後稿を改めたい。

#### 引用文献

- 金子浩昌 1988「加曾利貝塚出土の動物質遺物からみた食料と道具の諸問題」『千葉市立加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講演集』千葉市立加曾利貝塚博物館
- 後藤和民・庄司克 1972「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』5
- 西野雅人 2017「貝類」『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会
- 西野雅人 2019「まとめ 繩文時代」『千葉市餅ヶ崎遺跡』千葉市教育委員会, pp. 457-464
- 横田正美 1982「縄文時代中期終末期における集落の様相—千葉市すすき山遺跡を中心として—」『貝塚博物館紀要』8

#### IV 染谷津遺跡H 5

##### 1 概要

染谷津(そめやつ)遺跡は千葉市中央区宮崎町に所在する。京成千原線大森台駅西側にあたり、かつて東京湾に直接開口していた狭小な谷(宮崎谷)に面する標高24mの台地上に立地していた。平成3年2月から3月にかけて2地点計130m<sup>2</sup>の本調査を実施し、住居跡1軒(平安時代)と土坑7基を検出している。

報告書の記載によれば、貝層は36m<sup>2</sup>の「東側調査区」で調査した「第1号土壌」(現地表記C-001)で検出し、出土したのは貝殻と土玉1点である(鶴岡1996)。貝殻の分析結果も報告されているが、収蔵庫には掲載分以外の水洗済み・未分類の貝類が保管されていた。年代が不明確であるため、分析量を少なくしたものであるが、対象外のサンプルを廃棄するかどうか検討した際に、きわめて大きなハマグリを採取した典型的な事例として貴重な資料となると判断して、すべてを分析対象に追加することにした。計測も行われていなかったため追加することにした。

調査写真(写真1)をみると、貝層は「1号土壌」の掘り込みに伴うものではなく、それより新しい遺構に伴うものであることは確実である。貝層の下面是その周辺も含めてきわめて水平であり、隣のL22cグリッドでも同様の貝層を検出している(未報告)。したがって調査区全体を覆う竪穴住居跡の掘り込み内部であった可能性が高い。唯一の出土遺物である土玉は古墳時代前期から後期の指標となり、貝層の時期は古墳時代以降となる。複数遺構重複の可能性を一先ず排除すると、大きな竪穴住居跡は古墳時代後期に多いといえる。ハマグリのサイズは当地域の奈良・平安時代には見られないほど大きい。明確な証拠は得られていないものの古墳時代後期の竪穴住居跡の床面に堆積した貝層とみて大過ないであろう。古墳時代後期と推定される遺構内貝層1か所として、貝殻の分析を行った。



写真1 貝層堆積状況

## 2 分析結果

### (1) 貝種組成

8科12分類群の419個体を同定した。第1表に既報告分を①、今回分析分を②として示した。以下は合計の数値である。もっとも多いのはハマグリの36.5%であるが、アサリ25.5%、ウミニナ科15.0%、ツメタガイ12.9%の3種もかなり多く、以上の4種で9割を占める。特定の1~2種に偏らず、様々な貝種を利用していることが特徴である。シオフキやアカニシも数%、以下はごく少ない。いずれも内湾の砂底干潟で採取可能な貝種であり、1個体ずつだが汽水種のヤマトシジミと淡水産のカワニナが混じる。

### (2) 計測値

ハマグリの平均土標準偏差は $74.6\text{mm} \pm 9.3\text{mm}$ ときわめて大きい。平均が7cmを超えるデータは東京湾の豊富な分析例のなかでも稀であり、弥生時代から古墳時代中期に散見する。シオフキは計測個体が少ないが平均50.7mm、アサリは49.4mmである。アサリのばらつきが大きいのは、シオフキよりもアサリを選んで採取した志向を表している可能性が高い。3種とも3cm以下の個体が混じっていない。豊富な資源量のなかで大きな個体を選択した様子をうかがうことができる。なお、計測はしていないが、ツメタガイは小形主体であり、アカニシも4点のうちに、ごく小さなものが1点混じっている。

### (3) 卷貝類の食痕

アカニシのうち、小さなものはほぼ完形だが、大きな3点は体層部が細かく割れている。殻の保存状態は良好なので、身を取り出す目的で、殻を打ち割った痕跡とみられる。ウミニナ科も2点を除くすべてが破壊されている。ウミニナ科は塔形の形状から独特の身の取り出し方が古今でみられ、遺跡出土資料でも殻を意図的に割った痕跡が観察されている。そのほとんどは、殻頂部の小片と、殻頂部が失われた体層部に分かれて出土するものであり、先端を切断して身を吸い出して食べる「殻頂部折断一吸出し法」の痕跡である。県内では縄文時代早期から平安時代まで類例があり、大型貝塚形成期にはみられない(西野2006)。

本例は、この方法とは違って、体層部を打ち割って身を取り出したものであり、同様の事例は千葉市佐目沢遺跡で「体層部破壊法」と命名している。ただし、類例はほとんど追加されておらず、全体で3例目、古代では2例目となる。佐目沢例も古墳時代後期であり、2遺跡間の距離は約1kmに過ぎない。なお、ツメタガイの一部にも体層を破壊したものがみられる。

第1表 貝種組成

種名	①	②	合計	%
ハマグリ	67	86	153	36.5%
アサリ	43	64	107	25.5%
ウミニナ科	50	12	62	14.8%
ツメタガイ	27	27	54	12.9%
シオフキ	10	9	19	4.5%
アカニシ	8	4	12	2.9%
サルボオ	3	3	6	1.4%
バカガイ	2		2	0.5%
カガミガイ	1	1	2	0.5%
カワニナ		1	1	0.2%
ヤマトシジミ		1	1	0.2%
合計	211	208	419	100.0%

第2表 貝類計測値分布(殻長)

mm	ハマグリ	シオフキ	アサリ
-35.0			1
-40.0			1
-45.0			4
-50.0			2
-55.0			15
-60.0		1	9
-65.0		3	6
-70.0		10	1
-75.0		2	
-80.0		10	
-85.0		2	
-90.0		2	
-95.0			
-100.0		2	
試料数	32	4	37
平均	74.59	50.67	49.42
標準偏差	9.29	2.33	6.13



3種とも殻の保存状態は悪くないので、人為的に破壊された可能性が高い。ウミニナ科は「殻頂部折断法」という本種特有の身の取り出し方を知らなかったことがわかる。アカニシとツメタガイは比較的簡単に身を取り出すことができる。これほど徹底的に体層部を破壊した事例はなく、貝を食べる習慣がない人々であったことを想定できる点で興味深い。

写真1 貝層堆積状況

類例の少ない巻貝の体層部破壊はなぜ行われたのか。ウミニナ科については、「殻頂部折断」法という理にかなった簡易な方法を知らなかったため、苦労して身を取り出したのであろう。アカニシは、殻が堅牢であるため、現在でも生食の場合金槌で叩き割る方法が主流である。茹でれば簡単に身を取り出すことができる。大きなアカニシとツメタガイを生食した証拠といえるかもしれない。ただし、茹でてうまく取り出せなかっただということを考えられる。

なお、古墳時代以外の1例は、縄文時代中期・加曾利E IV式期の松戸市下水貝塚第8地点のK88である。ウミニナ科とイボニシを主体とするきわめて珍しい貝層であり、両種とも体層部が破壊されている。報告者は、破壊の意図を遺体の埋葬に伴う特殊なものとみている(阿部2014)。伝統的に利用の少ない2種を類例のない方法で食していることから、海や貝に疎い人たちの姿が想定できるのではないか。

#### 引用・参考文献

- 阿部常樹 2014 「動物遺体」『下水遺跡第8地点発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会
- 鶴岡英一 1996 「染谷津遺跡の調査」『千葉市染谷津遺跡・大森第1遺跡』千葉市文化財調査協会
- 西野雅人 1997 「ウミニナ類の身を取り出す2つの方法」『研究速報誌』50. 千葉県教育振興財団
- 西野雅人 2006 「貝サンプルの分析結果」『千原台ニュータウンXIVー市原市草刈遺跡(D区・E区)ー』千葉県教育振興財団

## V 向上遺跡 S 6 1

### 1 概要

向上(むかいあげ)遺跡は千葉市緑区平川町399他に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川水系のうち、高津戸町を水源とする支流の上流部、土気地区を水源とする本谷との間に挟まれた和泉町・下大和田町・高津戸町が存在する台地の一角落に位置する。遺跡は、標高68m、南北600m×東西300mの広い台地を括っている。発掘調査は平川カントリークラブ造成、関連施設の増設に伴って行われた。1次調査は昭和61年に遺跡の南東端、2次調査は平成元年に中央付近で行われ、いずれも報告書が刊行されている(村田・菊池1998、村田1991)。なお、調査時点では向エ(むかいえ)遺跡と呼ばれていた。

調査の結果、縄文時代の梢円型陥入穴14基、古墳時代から平安時代の住居跡47軒、掘立柱建物跡31棟、終末期方墳2基、土坑2基以上、室町時代の「平河館」に関連するとみられる遺構群を検出している。縄文時代の土器は早期、前期後葉、後期後半のものが出土しており、周辺の台地上でも前期の土器が多いといふ。古代の遺構は、古墳時代前期から中期の住居跡1軒、後期の住居跡1軒、奈良時代数軒のほかは平安時代・9世紀～10世紀の遺構であり、多くの出土遺物がある。縄文時代には狩猟好適地とされ、平安時代に集落開発が行われた地ということができる。

### 2 貝層検出遺構(第1図・写真2)

貝層を検出したのは42号土坑(旧C-43)である。報告書の遺構番号はすべて振り替えているが、新旧対照表がない。カッコ内は調査時点の番号である。土坑の掘り込みは上端径1.0m、底部径0.7mを測り、上部は溝と重複してやや不整形だが、底面はほぼ円形で、壁は垂直に近く立ち上がる。覆土下層に0.5m×0.4m、厚さ0.2mの混土貝層を形成している。報告書では一覧表のみが掲載されており、時期や性格には触れられていない。土坑出土遺物を全部見直したが、当遺構の遺物は見つからなかった。遺構の形状は整った円筒形で底面は広く平坦である。千葉市付近では縄文時代前期・後期と古代にこうした径0.7m～1.0mの円筒形土坑(小豎穴)の類例がみられる。今回の調査の中では、42号のほか、17号(旧C-8)・18号(旧C-9)・38号(旧C-40)・44号(旧C-50)・53号(旧C-78)・56号(旧C-84)・55号(旧C-85)・58号(旧C-92)・69号(旧C-365)・72号(旧C-241)・73号(旧C-366)・76号(旧C-368)、合計13基が同様の形態をもっている。このうち、



第1図 42号土坑

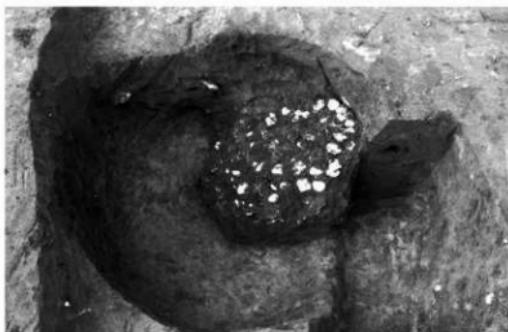


写真1 42号土坑内の貝層

50・53・58・69・73号で古代の土器が出土しているので、42号土坑も古代(平安時代)の遺構の蓋然性が高い。なお、今回未掲載遺物を確認した際に、11号住居跡(旧9号)の床面出土の青銅製帶金具を発見したので、末尾に簡単な記載と写真を掲載する。

### 3 分析結果

貝サンプルは平成29年に水洗済みの状態で見つかったので、水洗前の体積は不明である。サンプルは貝層全体を採取したものとみられ、全量を分析・保管対象とした。なお、調査時点ではC-335とされたピットからも貝が出土しており、資料が保管されていた。内容はアサリ6、シオフキ2個体であった。遺構の時代・性格とも不明であるため分析対象とはせず、貝殻は廃棄した。分析は、第一合成分のウォーターセパレーション(フルイの目5mm・2.5mm・1mm)を使用して水洗選別とフロテーションを行った。貝類を5mmから抽出したところすべて二枚貝であり、殻頂部を同定し最小個体数を記載した。また、ハマグリの殻長を計測した。貝種組成(第1表) 二枚貝2科2種の286個体を同定した。ハマグリ266個体・93.0%、シオフキ20個体・7.0%と、2種のみである。小規模な貝層であってもわずか2種の貝類からなる貝層の例はとてもめずらしい。

計測値(第2表) ハマグリの平均は52.8mmとかなり大きく、40mm未満の個体を含まない。シオフキの平均は46.5mmでばらつきが小さく粒ぞろいである。2種とも大きな個体を選択して採取した様子をうかがうことができる。

### 4 青銅製帶金具(写真2)

前述のように貝サンプルの原稿執筆のため、土坑出土の未掲載土器を検索したところ、「9号住居跡」いうラベルの付いた銅製品を発見したものである。貴重な資料であるため、写真と簡単な記載を付記することにした。これをもって掲載資料に追加し、埋蔵文化財調査センター収蔵庫の特殊遺物コーナーに収納した。資料は11号住居跡(旧9号)の床面出土の青銅製丸軸の裏金である。横31.1mm、厚さ1.0mmで鉛が2か所残り、1か所は痕跡を認める。

第1表 貝種組成

種名	個体数	%
ハマグリ	266	93.0%
シオフキ	20	7.0%
合計	286	100.0%

第2表 貝類計測値分布

ハマグリ殻長		シオフキ殻長	
mm	全体	mm	全体
-40.0		-40.0	
-45.0	15	-45.0	6
-50.0	35	-50.0	11
-55.0	19	-55.0	3
-60.0	14	-60.0	
-65.0	13	-65.0	
-70.0	10	-70.0	
-75.0		-75.0	
-80.0	1	-80.0	
-85.0	1	-85.0	
-90.0		-90.0	
試料数	106	試料数	20
平均	52.79	平均	46.49
標準偏差	9.01	標準偏差	2.93

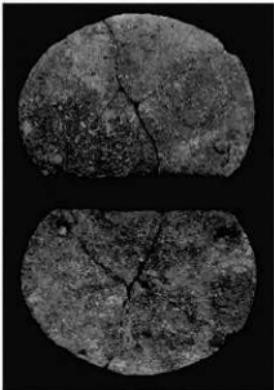


写真2 青銅製帶金具

### 引用文献

- 村田六郎太・菊池健一 1988 「向エ遺跡」『平川遺跡群』千葉市文化財調査協会  
村田六郎太 1991 『平川町向エ遺跡第二次調査発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会

## VI 都町山王遺跡 H 7・H 13

## 1 概要

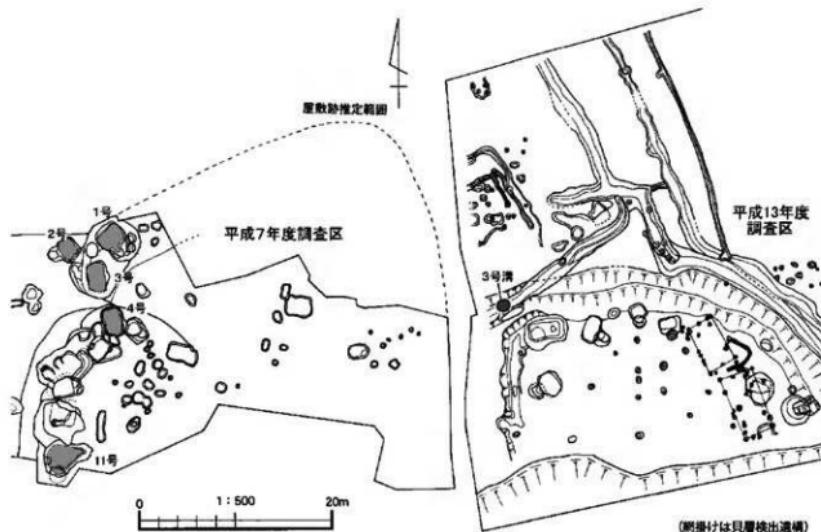
遺跡は千葉市中央区都町1085-2他に所在する。都川低地に突出する辺田と向台の台地に挟まれた位置に細長く突き出た標高20mほどの低位段丘面上に立地する。平成7年度と13年度の発掘調査で中世遺構群を検出している(第1図)。台地の南斜面を削って造成した平坦面から地下式坑や区画溝を伴う屋敷地などが展開している。出土した土器類の年代は13世紀と15世紀後半~16世紀初頭である。当地は中世千葉町の北東縁にあたり、発掘成果は、千葉町が発展した時期と、拠点を本佐倉城に移した時期の土地利用を考察する上で重要である。

7年度調査区の1号~4号・11号地下式坑の覆土内(大賀・近江屋2000)と、13年度調査のうち、「公共分」として調査した3号溝(D-003、白根2003)に堆積した貝層がサンプルとして採取されているが、分析は未了であった。そこで今回分析結果を報告するものである。貝サンプルは6遺構から7単位、70点以上あり(第1表)、検出した貝層の全量を採取したものとみられる。

## 2 分析結果

## (1) 貝種組成

12分類群の貝類5,827個体を同定した。全体でもっとも多いのはハマグリで69.9%を占める。次に多いのはシオフキの14.3%、アサリの10.2%でこの上位3種で94.4%を占める。4番目に多いイボキサゴの4.3%を加えると98.7%となり、その他の種は少ない。遺構間の差は小さく上位3種は安定しているが、



第1図 都町山王遺跡中世遺構群

例外は3号地下式坑でイボキサゴが多くアサリを上回る。以上の4種は東京湾東岸で通時代的に主体となるものであり、少ない貝種も含めていずれも近傍の干潟で採取し得たものと考えられる。ややほかと異なるのは4号である。ハマグリが突出せず、シオフキが少なく、アカニシ・オオノガイ・サルボオがややまとまっている。アカニシは保存状態がきわめて悪いが、特大のアカニシを選んで採取している。

## (2) 計測値

全体のハマグリの平均土標準偏差は $34.6\text{mm} \pm 7.7\text{mm}$ と弥生時代以降としてはかなり小さいが、遺構ごとに見ると11号のみ $42.8\text{mm} \pm 6.0\text{mm}$ とやや大き目で粒揃いである。そのほかの1号～3号では50mmを超える個体はほとんど混じっておらず、25mm以下の幼貝も多数採取している。シオフキは平均35.5mmとハマグリに近く、アサリは31.6mmとシオフキよりやや小さい。この2種はハマグリほど大きくならないが、シオフキは粒ぞろいでかなり大きいといえる。アサリは小さくても採っている。イボキサゴは計測可能個体が少ないと、大き目である。かご等を使うイボキサゴ漁で混獲されるウミニナ科、アラムシロはそれぞれ1個しか混じっていないので、道具を使わず大き目のものを1つずつ採取したものと考えられる。

第1表 品サンプル一覧

品名	略称	遺構	採取法	分析量
H7-1号地下式坑	1号	地下式坑	一括	4.0
H7-2号地下式坑	2号	地下式坑	一括	16.8
H7-3号地下式坑	3号	地下式坑	一括	11.2
H7-4号地下式坑-1	4号-1	地下式坑	一括	2.0
H7-4号地下式坑-2	4号-2	地下式坑	一括	不明
H7-11号地下式坑	11号	地下式坑	一括	31.0
H13-D003	D003	溝	一括	5.5
合計	7単位			70.50±a

第2表 品種組成

品名	1号	2号	3号	4号-1	4号-2	11号	D003	合計	%	上位種累計
ハマグリ	278	670	220	53	28	2822	1	4072	69.9%	84.2%
シオフキ	44	294	125	19	29	148	177	836	14.3%	94.4%
アサリ	53	67	28	98	28	257	63	594	10.2%	
イボキサゴ	2	16	119		16	90	8	251	4.3%	98.7%
アカニシ				2	24	2		28	0.5%	
オオノガイ					15	8		23	0.4%	
サルボオ				3	10	2	1	16	0.3%	
ツメタガイ						2		2	>0.1%	
オキシジミ	1					1		2	>0.1%	
ウミニナ科	1							1	>0.1%	
イボニシ	1							1	>0.1%	
アラムシロ						1		1	>0.1%	
合計	377	1050	492	175	150	3333	260	5827	100.0%	
水洗前体積	4.0	16.8	11.2	2.0	—	31.0	5.5	70.5 ±		

第3表 貝類計測値分布

ハマグリ殻長						シオフキ殻長		アサリ殻長		イボキサゴ殻長	
mm	全体	1号	2号	3号	11号	mm	全体	mm	全体	mm	全体
-20.0	1			1		-20.0		-20.0		-10.0	
-25.0	47	3	34	10		-25.0		-25.0	10	-11.0	
-30.0	131	35	79	17		-30.0	16	-30.0	87	-12.0	
-35.0	174	78	68	16	12	-35.0	60	-35.0	95	-13.0	6
-40.0	103	24	15	6	58	-40.0	65	-40.0	39	-14.0	9
-45.0	76	2	1	1	72	-45.0	24	-45.0	8	-15.0	7
-50.0	41		1		40	-50.0	1	-50.0		-16.0	
-55.0	10				10	-55.0		-55.0		-17.0	
-60.0	7	1			6	-60.0		-60.0		-18.0	1
-65.0						-65.0		-65.0		-19.0	
-70.0						-70.0		-70.0		-20.0	
-75.0	2				2	-75.0		-75.0		-21.0	
-80.0						-80.0		-80.0		-22.0	
試料数	592	143	198	51	200	試料数	166	試料数	239	試料数	23
平均	34.59	32.23	29.34	29.34	42.81	平均	35.55	平均	31.61	平均	13.75
標準偏差	7.74	4.03	4.31	4.78	6.00	標準偏差	4.20	標準偏差	4.06	標準偏差	1.01

### 3 考察

東京湾東岸の既存の分析成果をみると、16世紀以降にハマグリが激減し、シオフキが増えることが判明している(西野2004)。その理由として、台地の削平を伴う城館等の造成によって大量に流出した土砂によって、環境の変化に敏感なハマグリが壊滅的状況となつた可能性が考えられる。本資料は、15世紀代にはまだハマグリが採取可能であったことを示す点できわめて興味深い。ハマグリについては、11号のみ大きいが、1号～3号は小さめの個体に偏る。資源量の減少が影響している可能性が考えられる。

### 引用文献

- 大賀 健・近江屋成陽 2000『山王遺跡発掘調査報告書』山王遺跡発掘調査団  
 白根義久 2003「都町山王遺跡」『都町山王遺跡・居寮台遺跡』千葉市教育委員会  
 西野雅人 2004「貝サンプルの分析結果」『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡－』千葉県文化財センター